別にして同じところをもとめよう

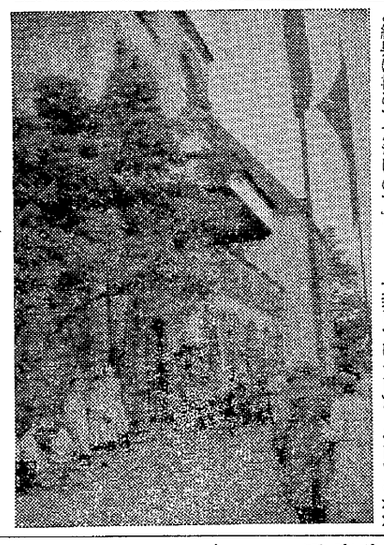
回　世　界　労　組　大　會

世界労連の歴史と第四回大會

一九四五年二月、ロンドンにおいて世界労働組合会議が開かれましたが、これは第二次大戦中のことでこの十月第一回大会がパリーで開かれました。それ以前一九四二年ごろから、労働者統一の動きが見えはじめ、四四―四五年と占領されていた国々の解放が実現されるに従つて統一への動きも大きくなつて行つたのです。当時統一に最も強く反対したのはヒットラーで世界労連はこれと果敢に闘いました。

更に統一に反対したのはAFL（アメリカ帝国主義の片棒をかついで世界労連の加入に強硬に反対したのです。これは始めから分裂策動を行い、世界労連の分裂の原因はこのときにねざしていたわけですこうして一九四九年一月、ついに分裂しました。同年七月にはミラノ（イタリー）で第二回世界労組大会がひらかれ、分裂の検討がおこなわれました。この大会には植民地における解放闘争の援助も打出され、熱心に討議されました。

一九五三年三月、ウイーンで第三回世界労組大会がひらかれ、統一は可能であるという点を明らかにし、各国労働者間の交流促進が決議されました。このことのために、世界労連が、果してきた役割と結果は極めて大きいのです。



今回の第四回大会には七九カ国八〇二名の代表と一〇名のオブザーバーが参加しました。これらの代表のなかには、日本代表十八名（内二名は女性）が含まれ、地域別にみると、アフリカ二二名、アジア太洋洲一〇九名、ヨーロッパ四六九、中近東四七名、インター（世界労連産業別組織）二二名、計八〇二名（うち女性七五名）で東独ライプチツヒで盛大にひらかれました。その中心課題である統一の問題については、あらゆる労働組合が闘つた要求を検討してみて、賃金引上げ、労働時間短縮等の七項目が一致していました。そしてこれが統一行動がくめる要素であり、このなかから統一行動をくんでゆこうと決意されました。

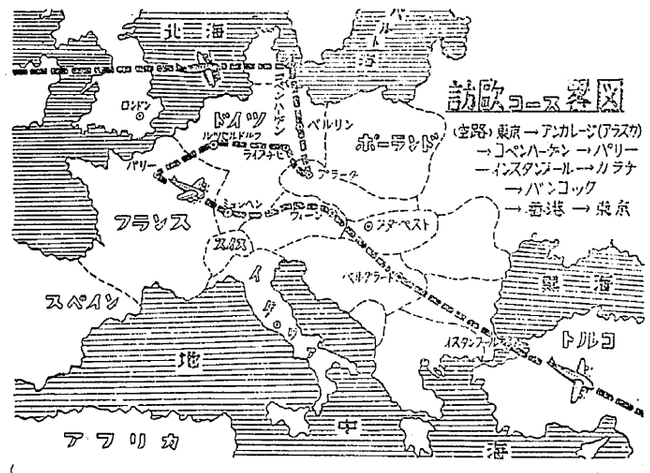
更に全人類の一致した要求「平和」を守る闘いを積極的にすすめることが強調され、統一をつよめるため国際交流を強化、発展させるべきことが明らかにされました。

尚世界労連の組織の推移をみると

第一回大会当時　六、五〇〇万
第二回　〃　七、一〇〇万
第三回　〃　八、二〇〇万
第四回　〃　九、二〇〇万

と年々、拡大していつています。

（写真は大会々場）



大会出席と視察のあしあと

東京羽田空港を出発したのは、九月二十八日午前七時、キスカの上空を飛んでアラスカのアンカレージに一時間休憩し、北極の上空を飛び日本を出発してから二十九時間で、デンマークのコペンハーゲンにつきました。

ここを出発しチエコのプラーグに行き目的地東独ライプチツヒについたのは十月一日の夜でした

大会は十月四日より十五日まで十二日間盛大に行われました。この大会終了後二十三日まで八日間東独を視察致しました。

その間、ゴータ綱領で有名なゴータの工場またナチが残虐の限りを尽くしたといわれる人間ときつ場ビユツヘンベルグ収容所や東独で一番機械化が進んでいるといわれるカールマルクス炭鉱等を見学することができました。

十月二十四日西独にはいり、私達の組合員の派遣されているハンボンに行き現地の実情を見学し十月二十七日フランスに行きフランス最大の炭鉱地帯ランスの現地に行きました。ここで労働者の闘いの実態や闘いの歴史を学び更に組合が持つている生活協同組合の施設を見学いたしました。

十月三十日フランスを出発ユーゴに行き色々の勉強をすることができました。なかでもこの国の炭鉱のヘルニヤ、トロボニヤ炭鉱の坑内外施設や福利施設をみて同じ社会主義諸国でもその建設の相違をありありとみせられた次第です。そして書物ではどうしても知ることのできなかつた多くのものを知ることができました。

かくて十一月四日ユーゴを出発イスタンブール、バンコツクと政治的には独立しているが経済的には支配されている半植民地の実体を各一日づつではありましたが、みることができました。そして十一月八日、ようやく日本に着くことができたのです。

総ての力を統一へ

第四回世界労働組合大会報告

久保田武巳

中央委員会の議決により、東独ライプチツヒに於て十月四日より開かれた第四回世界労仂組合大会に出席しその後、西独、フランス、ユーゴの炭鉱を中心とする労仂事情を視察し、十一月十七日、元気で、なつかしい三池に帰つてまいりました。出発に際して、大会に出席するための資金カンパ並びに旅券獲得についての幾多の協力と、心からの友情をいただいた上部組織関係者、友山の同志並びに組合員家族のみなさんの温かい御支援にたいし心から感謝申し上げたいと思います。

わたしの行程は、大会が終つたら、ソ連、中国訪問が計画されておりましたが、ソ連の革命四十周年記念行事と中国の組合大会

大会討議が教えるもの

△統一は労働者の使命

労働者の統一こそ帝国主義、独占資本に対して闘う労働者の使命であり、統一のないところに労働者の勝利はありません。そしてこの統一をいかにして成功させるかが、第四回大会の中心課題であつたのです。

大会における主要な意見を列挙してみます。

ダンゲ（世界労連副議長―インド）

イ、労働者階級が政治的見解が一致しない限り、共同の行動も労働組合の統一もできないということは正しくない。なぜなら、労働者は自分達を守るための共同の要求をもつているからである。

ロ、しかし統一は決して容易なものではなく、労働者階級としての共同の要求のなかから統一を求めてゆくべきである。

ハ、そして労働運動は常に変化していくし、大衆は前進しているのであるから繰返し相談し、話合いをつづけることは決して無意味ではない。即ち大衆の意見は上部の態度を変化させる力をもつているからである。

ニ、さらに組合の幹部間で諒解がつけば、なお統一は早くできるし、この組合幹部と大衆の二つのどちらかを忘れても統一を達成することは困難である。

ホ、われわれは批判、相互批判は行うべきであるが相手の感情を傷つけてはならない。

一番特色ある意見として次のように云つています。

へ、労働組合の間で意見が違うことがあるが、その一致しない点は別にしておいて一致する点で共同行動を組むべきである。その闘いをしている間に違う点も一致してくる様になる。

また過去におかした分裂の自己批判として

ト、統一を主張するものがみづから分裂の要因をつくり、労働者階級から孤立していつた。そして更に、セクト主義は帝国主義者の侵入するスキをつくつた。

ビツトリオ（世界労連議長―イタリヤ）―十一月三日死亡

「一部の右翼組合幹部は帝国主義の宣伝政策にのせられていたが、下部組合員大衆の意識の高揚はこの態度を改めざるをえなくしているし、ここに統一して闘える基礎があるし、闘えることを証明している。そして統一は理論の段階ではなく実行の段階である」フラション（フランス総同盟書記長―フランス）

「統一の必要性と分裂の影響をあくまでねばり強くそして解り易く大衆に知らさなければならない。そしてどんな小さなことでもないがしろにせず努力して行くべきである」。

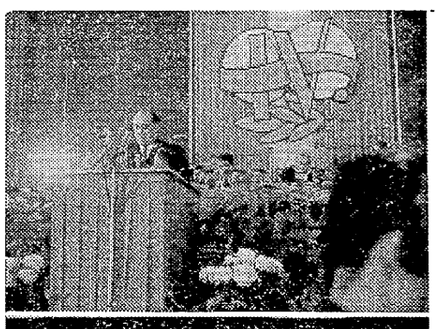
サンティ（イタリヤ）

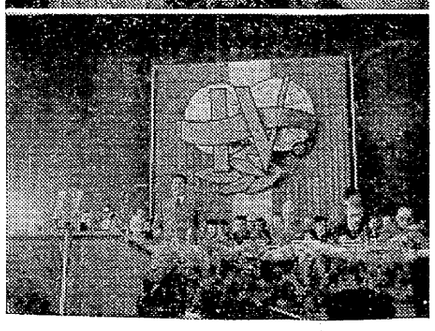
「イタリヤ総同盟は、いろいろの思想を持つている人達によつて組織されているのであるが、このことは組合運動推進の障害にはなつていない。それは思想の相違することが統一に対する決定的障害でないことを意味している。各国の労働組合はその国の特殊性にもとずいて統一を進めなければならない。」

サイヤン（世界労連書記長―フランス）

イ、統一を支持するものは誰か、統一に反対するものは誰かを知らなければならない。世界労連に加盟している各国組合のうち一つとして統一に反対しているものはない。

ロ、世界労連が時間短縮の闘いを主張したとき国際自由労連もこれを認めざるを得なくなつたがこれは労働者の要求は同じであることを意味しているし、それと共にこれらの組織の内部に新しい変化が起つていることを意味している。そしてどんなイデオロギーをもつておろうとあらゆる労働組合が統一行動を組むことができる要素がここにあるハ、あらゆる労働組合が闘つた要求を検討してみると次の点で一致している。そしてこれが統一行動をくめる要素である。





〔上〕第一議題を提案するサイヤン書記長その論旨の中心は統一を発展させる事に就て〔下〕開会挨拶をするビツトリオ議長

(1)賃上げと最低賃金制の確立。従つてこれに伴う老令年金その他の年金を引上げること。
(2)労働時間の短縮、残業の制限
(3)オートメーション、新しい進歩した技術を生産により入れる際の有害な結果に対する反対。
(4)同一労働賃金の原則の適用。賃金、就職、社会的待遇における一切の差別の撤廃。
(5)有給休暇の延長。
(6)労働者住宅の建設と改善。
(7)労働災害と職業病対策。

大会はこの点に関し、小委員会において検討した結果、これらの要求は、一国内の統一と国際的な統一をうちたてるための実践的基礎となるものであると確認しました。また小委員会は以上各意見を集約し、そのなかに特記すべき事項として次のように云つています。

「所属のちがう労働者や労働組合のあいだに統一行動がうちたてられている場合には、かならず目にみえる成果をかちとることができた。だが労働組合の分立と分裂を克服していない場合には労働者の闘争は困難になり、はつきりした成果があがらなかつた」

社会主義国に於ける労働組合の役割とその在り方

社会主義国の労働組合がもつているような経済的社会的分野における多数の権利と広汎な権限を労働組合に与えている資本主義国はどこにもありません。このことは社会主義国において労働組合の発展は国家の発展に連らなり、資本主義のもとでは独占資本の政治的経済的特権と労働組合の権限の拡大とは両立しないことを意味しています。

具体的にいうとまず首切り失業の脅威が完全にないということ、年金制度、災害補償、医療、休業補償、住宅など比較すればきりがないでしよう。なかでも一番大きいのは生産計画並びに労働者に関係ある事項については労働組合の承認がない限り実行できないということです。

自分達の手で生産計画をたて、その利潤もまた自分達の手で配分することができるということはどんなに働きがいのあることか、そしてそのことは生産に対するはげみにもなることでしよう。

このことはすでに何回もの視察団や先輩の人たちの報告にもあることであり、あえて新しくいうまでもありませんが、大会で討議された理論的な面と視察で得た実際的な面とを合せて、問題点を検討してみましよう。

一、生産の責任をもつ

大会においてサイヤンは次のようにいつています。

「労働者階級が国家権力をとつたあとでは、生産の発展は労働者階級の基本的な利益である。労働者の生活の改善は生産が発展するときにのみ可能である。したがつて労働組合はこの中心的課題にそつて活動を進めなければならない」

このように労働者の生活の改善向上は社会主義になつたことによつて保証されるのではなくて、生産が発展することによつてのみ保証されるということです。

ある指導者は「社会主義とは木になつているリンゴをとるようなものではない。自らの手でつくり出すということであり、労働者が権力を握り、搾取機構が排除されたということである」といつています。一例をあげると、東独のシヤフト炭鉱が二日分の生産が遅れているということを聞いてこれをとりもどすために鉄道の労働者が応援に行つた、という話を聞きました。

このように労働者が生産に対する全責任を持つているのが職場の実態です。すなわち社会主義国においては権利義務感はわれわれの考えている観念よりも強く、なかでも生産に対する責任は重大です

二、大衆に理解させる

さらにサイヤンは次のようにいつています。

「労働組合の民主々義を守ることそしてこのためには労働組合員の意識を発展させ、組織の責任ある活動を発展させることである」

なぜ労働組合の民主々義を強調しているのでしようか。このことは非常に重要なことであり、このことが徹底しないところに労働者の不満が起つたり、内部不統一が起つたりするのです。

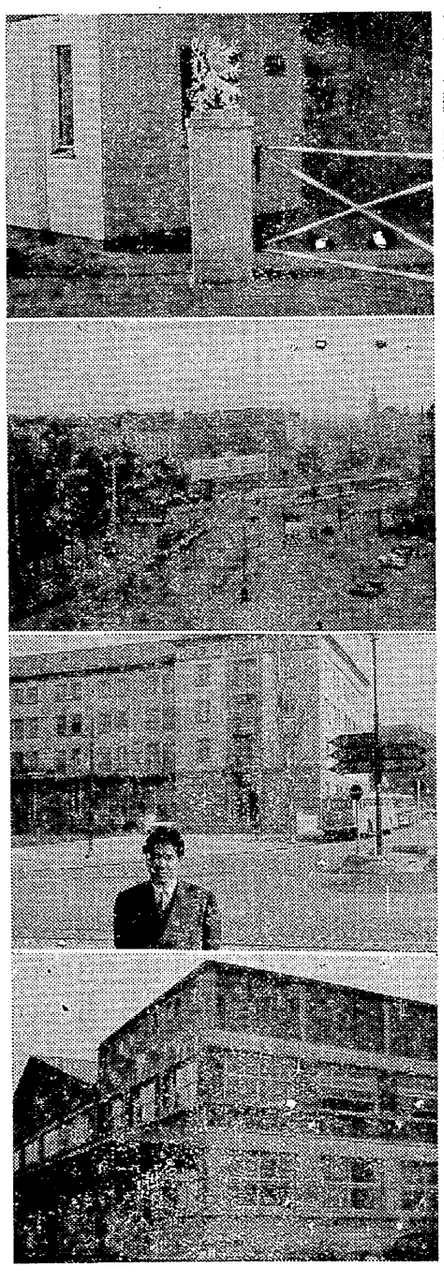
まずこの第一は指導者層の指導理念の統一がなされなければならないこと。

次にはこの指導理念に基づく大衆の裏付ができないところには生産の向上発展は期待できないこと

この二つが徹底的に大衆討議され、組合民主々義が確立されてはじめて社会主義の発展があり得るということです。

このことは、社会主義を発展させるためには、生産を発展させる以外に道はないということを前にものべましたが、そのためにはすべてのものより優先的に工業重点の方針がとられるのは当然でありますが、この方針も大衆の完全な理解がなければ非常に困難なことであり、これを急激に実施しようとすればするほど、労働者に対する負担が増大し、与えるものは少いという結果がでてきます。このことを大衆に理解させる苦労はなみたいていのことではありません即ち社会主義建設のまえに思想改造ということを忘れてはならないのです。このことはスターリンがいつた「労働組合とは共産主義の学校である」ということをもう一度検討する必要がありましよう。

日本の労働運動が与えられた民主々義として幾多の欠陥があるように、戦後の社会主義国にも与えられた社会主義としての問題をも



チエコと東独の国境　ライプチツヒ市街　東独炭鉱労働者のクラブ　フランスのランスにある生活協同組合

農業労働者　二五〇万
組織未加盟労働者　七八〇万
（組織未加盟労働者が圧倒的に多

☆職場闘争については、日本のわれわれが考える大衆闘争の基盤としての職場闘争でなく、不満は一件の要求であつたが、その結果、配給制度をつくらざるを得なくなつたし、その配給のために作つた組合が組織され、運営されている協同組合ができたのは、一九四四年、フランス解放後であるが、その組織は賃金の五%以下とされており、他のどの国よりも著しく好条件下にある。

借家賃は賃金の五%以下とされ